

母殺しに代えて：『わたしがいどんだ戦い 1940 年』に見る 代理母－代理娘関係

Instead of Matricide: The Surrogate Mother-Surrogate Daughter Relationship
in *The War I Finally Won*

梅 野 愛 子*

Aiko Umeno

要 約 本稿は、キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー作『わたしがいどんだ戦い 1940 年』に見られる「代理母」－「代理娘」の関係性について考察するものである。同作は、『わたしがいどんだ戦い 1939 年』の続編として書かれたものだが、作者は作品冒頭で主人公の母を戦死させ、前編で代理母役を果たしていたスーザンとの母娘関係を結ぶために、新たな代理母、ソールトン夫人に焦点を当てている。本稿では、いかに夫人が主人公にとっての代理母と化していき、代理母娘関係を構築するかを検証した上で、主人公が母性的影響力と娘になることを体験していく過程を分析する。最終的に、代理母がプレティーンの主人公にとっていかなる役割を果たしているか考察する。

キーワード：代理母－代理娘関係、わたしがいどんだ戦い 1940 年、
キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー、母娘関係、児童文学

Abstract This article explores the relationship between the “surrogate mother” and “surrogate daughter” in *The War I Finally Won*, which was written by Kimberly Brubaker Bradley as a sequel to *The War that Saved My Life*. In the beginning of the book, Bradley has the protagonist’s mother die in the war and focuses more on Lady Salton, a new surrogate mother, to form a bond with the protagonist and the former surrogate mother, Suzan, in the prequel. This article examines how Lady Salton forges a relationship with and becomes a surrogate mother for the protagonist, Ada. It then analyzes the process by which Ada experiences maternal power and how she takes on the role of a daughter through her relationship with her surrogate mother. Finally, this article discusses the significance of a surrogate mother for a preteen protagonist.

Key words：Surrogate mother-surrogate daughter relationship, *The War I Finally Won*,
Kimberly Brubaker Bradley, Mother-daughter relationship, Children’s literature

はじめに

児童文学では、物語の数だけ親子関係が描かれてきた。それは当然、児童文学の中心に子どもがいるからだ。なかでも母－娘関係は母親像と合わせて父－息子関係以上に論点となってきたと言えるだろ

う¹⁾。本稿は、児童文学のなかで、葛藤を抱える母娘関係を調停するべく登場する代理母という機能に焦点をあて、キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー作『わたしがいどんだ戦い 1940 年』²⁾ (2017, 原題 *The War I Finally Won* (2015)³⁾ 以下『1940 年』) における代理母－代理娘関係を検証するものである。

同作は、『わたしがいどんだ戦い 1939 年』⁴⁾ (2019, 以下『1939 年』) の続編として書かれた作品である。前作『1939 年』はニューベリー賞オ

* 人間生活学科人間発達学専攻
Graduate School of Human Life Science,
Division of Human Development

ナーブックにもなっており、第二次大戦下のイギリスを舞台として、右足が先天性内反足で産まれたばかりに母親から虐待を受けてきた10歳の少女エイダが、それまで家に閉じ込められ、広い社会と人間関係を経験しないままに育った環境から、弟が集団疎開に出ることをきっかけに^{注1}、弟とともに家を出ることで物語が展開していく。この作品は、障害を扱った児童書に贈られるシュナイダー・ファミリーブック賞も受賞したとおり、エイダの内反足と虐待という設定と、大戦という背景のなかで集団疎開を機に動き出す展開が、物語の強力な軸であった。しかし、続く『1940年』では、主人公の人生の文字通りの足枷であった内反足を手術で整形し、同時に足枷の元凶であった実の母親が空襲で死亡したところから物語を始めている。つまり、続編は「母殺し」から始まるのである。

子どもに向けて書かれる児童文学では、基本的に周囲との関係性や問題を修復して主人公が成長することを目指すため、時に物語は一種の箱庭的な空間となって主人公を救うための導きやファンタジーが出現する。とりわけ、母娘関係の修復の際に出現するのが、「代理母」である。本稿では、この代理母の出現に加えて、『1940年』が主人公エイダに「代理娘」としての役目も課していることに注目し、その代理母-代理娘関係を検証してみたい。なお、考察の参考に、エイダと同じプレティーンの主人公と母親との間にイデオロギ的対立が生じ代理母役が出現する好例として、ジャクリン・ウィルソンの『リジーとひみつのティーパーティー』⁵⁾(原題 *Lizzy Zipmouth*)⁶⁾からも例を引きつつ論証していくこととする。

1. 母殺しの難しさと「代理母」

精神分析においても、母娘関係に関する書籍は枚挙にいとまがなく、それらは母娘関係が世代を下ってもなお社会の変化と関連しながら困難な関係性を再生産し続けている証左だろう。そしてその多くが、密着しすぎた母娘関係に当てられている⁷⁾。母親の過干渉や強力な力に飲み込まれたまま、成長期をとうに過ぎてその力に苦しむ女性たちの訴えが、定期的に言説にのぼってくるのがうかがえる。多くの実例が示すように、母親の力の除去が難しいのは、母親の願望や執着、あるいは単純に過剰な愛情といったものが、娘側に内在化してしまい、娘本来の

性質を侵食してしまうからである。しかし、母からのこうした浸食や抑圧は内在化が故に取り除こうとすると大変な困難を伴う。なぜなら、「母殺し」を試みれば、それはそのまま、娘にとっても自傷行為になってしまう⁸⁾からだ。内在化した母、インナーマザーの除去は、娘にとって自らの一部を切り取る行為ともなるのだ。

そうした言説のなかで、本稿の「代理母」に焦点を当てるなら、例えば斎藤環が例として挙げている、ドイツ留学中の下宿先の老夫婦を両親のように慕っていた女性の話⁹⁾、実の娘のいない姑との嫁姑関係の方が良好な傾向にある¹⁰⁾、といった話は、以下に説明する「代理母」に似たものと思われる。斎藤も「確かに血縁は無条件に母性を保証してはくれません。むしろ母性とは、人生のおりおり自ら求め、探し当てていくべきもの」¹¹⁾なのかもしれない、と語っているが、こうした事例に関して実例から分析を試みている資料を見つけることはできなかった。代わりにカウンセリングの現場では、やはり父親の不在が母娘の密着を招く一因として、父親の積極的な介入を薦めているようである。

また、さまざまな一般向けフィクションから母娘関係を扱ったものを分析した『だから母と娘はむずかしい』¹²⁾では、均衡を失った母娘の物語が数々出てくるが、そのなかにも有力な解決策を見出しているわけではないようだ。こうした一般向けフィクションに対し、児童文学は子どもに向けて書かれるという点で、主人公に解決策を与えないわけにはいかない。同書のなかの「母親の〈支配〉を逃れる応報がもうひとつ残されている。それは母親の下位性を幻想のレベルで極限まで押し進め、無意識にはあるが母の死を強く願うことだが、これは荒療治」¹³⁾であるとか、「母親はどうしても取り替えられないが、最初に娘が母親に対して無条件に認めた絶大な力をなんとか抑制しようと努力するのは当然だ」¹⁴⁾といった指摘に対して、児童文学の場合、「代理母」を立てようと企てると言えるだろう。それは、母殺しの代わりに、自分の周囲で別の高位の女性を見出す方法である。

児童文学における「代理母」

トライツは *Waking Sleeping Beauty: Feminist Voices in Children's Novels*¹⁵⁾ の第7章のなかで、その構造自体が妊娠した母体を示す物語内物語をもった入れ

子構造のテキストに言及している^{注 2}。その際、こうしたテキストの例としてあげている『クローディアの秘密』¹⁶⁾と『わたしはアリラ』¹⁷⁾において、それぞれフランクワイラー夫人とスザンヌを「surrogate mother 代理母」¹⁸⁾としている。そして、「母性に満ちあふれた物語行為をつうじて、母親との葛藤を乗り越えると、母性をいくらか受け入れられる」¹⁹⁾のだと指摘するが、主人公が実の母を受け入れられるようになることに寄与するのは、テキストの母性的構造とともに、代理母との関係性を通過することも大きいように思われる。つまり、「代理母」とは、母親に代わって主人公と密な関係性を結んだ上で、主人公の心理的な問題を解消し、結果的に母親との間に生じた対立や不仲を調停するような役目を果たす女性登場人物のことである、と定義づけてよいだろう。

これはおそらく、多くの実際の精神分析事例でも理解できるように、母親の影響力の強大さから一時的に主人公を保護しなければ、主人公がどこかで潰されてしまう可能性があるからだ。「If the “shadow” of a mother’s power is represented as looming tall over her daughter in Freudian psychodynamic narratives, the dissolution of this power is represented through an imagery that describes the maternal body as “fading” and “crumbling” away. フロイト精神力学的な物語において、母親の力の「影」が娘の上にのしかかるように表現されるとすれば、この力の消滅は、母体の「霧散」や「崩壊」といったイメージによって表現される」²⁰⁾という Crew の指摘は、母の影を退けるために何らかの方法で母殺しに相当するものを母体に対して果たさなければならないことを物語っている。しかし、成長過程の主人公、とりわけ今回の『1940 年』のようにプレティーンの場合^{注 3}、母親の影響力を避けつつも同時に、どうしても母たる存在も必要としているというアンビバレントな状態にある。その両方の役目を果たすのが代理母である。「〈母のない娘〉とは逆に、〈母のありすぎる娘〉とでも呼ぶべき女性の方が、実際は母性を拒否する傾向がはるかに強い」²¹⁾のであれば、母性を拒否する姿勢がすでに母娘の系譜の歪んだサバイブのかたち²²⁾であることになる。代理母は、母性を否定しないまま子どものアイデンティティを守る手段として、児童文学という心理学的実践の場に生じた知恵だと言えるかもしれない。

またここには、母親の力の強さに対抗できるものは同じ母親に相当する人間でなければならない、という確固たる力関係も見えてとることができる。例えば、Joosen の祖父母に関する研究²³⁾からも世代間におけるパワーバランスがよく理解できるだろう。Joosen によれば、祖父母かそれと同等の世代の登場人物と主人公の関係が密になると、両親かそれに相当する世代は降格させられる。祖母が代理母の役割を果たすものとして、本稿で参照する *Lizzie Zipmouth* も同様の構造が見られる^{注 4}。実際に祖父母世代が両親に代わって子育てをすることは、現実の三世代関係にも言えることだろう²⁴⁾。こうした三世代関係性からすれば、母の力の強さは、別の母をもってするか、母より強い母、つまり文字通りの grandmother 祖母をもってしか退けられない性質があるのだろう。密着しすぎた母や強大な母の影は、同等の力によってこそ崩すことができるのである。そして、そこには残念ながら父やそれに相当する男性登場人物の力も一少なくとも児童文学では、母の力と同等の質量は体现できないようである。結果的に、児童文学のなかでは母娘関係の問題がテーマとなった際、女系の登場人物が密な関係性を構築する傾向にあると言える。

『わたしの挑んだ戦い 1940 年』はこの典型例でありつつ、さらに「代理娘」という役目を主人公に課し、綿密な母娘関係と女系登場人物の連なりを張り巡らせた作品である。以下、その代理母娘関係について検証してみる。

2. 『わたしの挑んだ戦い 1940 年』の場合

物語はエイダの内反足の手術から始まる。手術は無事に終わるが、術後にエイダと弟のジェイミーの母がロンドンの空襲で死亡したことが知らされる。1 章目冒頭、エイダの一人称の語りは、「You can know things all you like, but that doesn’t mean you believe them (物事は好きなだけ知ることができるけど、知ることと信じることは違う)」²⁵⁾と語っているが、この know と believe の間の差について、以下のような言葉も語っている。母の死を知った彼女は、「I don’t know whether Mam and I could have had a happy ending. [...] but it was another thing I didn’t fully believe」²⁶⁾と語る。続編は、エイダが頭でわかることと心で信じることの隔たりを行き来しながら、スーザンが自分の母になる成り行きを頭で理解

し、なおかつ母とは信じられなかった「幸せな結末」²⁷⁾ に向かって、スーザンとジェイミーと三人で歩み出せるかどうかを、術後の新しい足で確かめていく物語である、と言える。

ブラッドリーは、前編の内反足と母親からの虐待を創作的外科手術と言わんばかりにあっさり除去し、そうしておいてスーザンとの母娘関係が「後見人」という名の下に接ぎ木されるのだが、エイダはスーザンを「ママ」と呼ぶことを繰り返して拒む。親友のマギーが、スーザンは母親なのか、と訊くと、法的な後見人にすぎず、それの方がいいのだ、と答え²⁸⁾、ジェイミーが腕を折ってスーザンを求める場面では、スーザンをママと呼ぶジェイミーに、「スーザンはママじゃないよ」²⁹⁾、「その呼び方、やめなよ!」³⁰⁾と都度、訂正をしている。続編からエイダの代理ではない本当の母親役に昇格したスーザンだが、エイダのこの拒絶が、スーザンとの母娘の接ぎ木にずれが生じていることを示し、結果、第二の代理母が要請されることになるのである。

ソールトン夫人の代理母化

その代理母役を務めるのがソールトン夫人なのだが、興味深いのは、冒頭の内反足の手術代はソールトン夫妻が負担していることである。母からの虐待とエイダの心の傷の象徴のようだった内反足の整形手術の裏に、ソールトン夫妻による援助がすでにあるのだ。しかし、エイダは手術代を払ってくれたソールトン夫人を好きになれない。夫人が治った右足を見せるよう頼んだ際—この時点で、夫人にも多少の不躰さがあることは否めないが—、エイダは夫人の印象をこのように語っている：「Lady Thorton wasn't nice. She was fierce. She was nosy. She always got her way. [...] She had paid for my surgery [...] but I didn't have to like it」³¹⁾。しかし、夫人の干渉にエイダが感じているこのうっとうしさこそ、思春期の子どもが母親に対して感じて当然の感情だと言える。

スーザンとソールトン夫人の母役の決定的な分岐点を表れ出ているのが、それぞれからもらったクリスマスプレゼントへのエイダの反応だ。実の母の虐待によって家に閉じ込められていたエイダには一般社会への知識が欠落しており、さまざまな言葉が新鮮に響く。エイダの親友でソールトン夫妻の娘マギーの薦めで、クリスマスプレゼントとしてエイダは辞書をもらう。長く監禁状態にあった子ども時代

を補填するべく、エイダは言葉のひとつひとつから、世界の成り立ちや人間の感情の機微に至るまでを知ろうとする。そして、辞書の最初の頁に載っていた言葉「ツチブタ／*Aardvark*」³²⁾を読んで笑い、「顔をあげて（略）「ありがとうございます!」」³³⁾とお礼を言う。このとき、夫人がエイダの代理母にノミネートされたと言ってよいだろう。エイダが辞書で見知らぬ言葉をひき、ひとつひとつの意味とともに世界を理解する、という意味で、そこにはコーツ³⁴⁾が『シャーロットのおくりもの』について言及しているウィルバーへの言葉の与え手としてのシャーロットの役割と同様のものがうかがえる。

一方、スーザンからは手製の布人形をもらっているのだが、エイダは、自分は赤ちゃんではないと言ってこの人形を拒む。夫人からもらった辞書への反応とは対照的である。欲しくなければ仕方ないと折れるスーザンに対し、エイダは「I needed a doll a long time ago. [...] It's too late for me to have one now」³⁵⁾と答えている。『第二の性』のなかでボーヴォワールも述べているとおり³⁶⁾、人形遊びは、娘側が母親側の役割を迫体験するという間主観的体験を提供する遊具だ。エイダの言葉の「昔」という意味は、人形遊びに適した年齢ではないという意味以上に、人形が本来であれば、母親との関係性の構築を補助する役割をもって存在すべきものであったことを意味している。

ジャクリーン・ウィルソン著 *Lizzie Zipmouth* は、「ガーリー」なものと人形の大好きな主人公リジーが母親側のフェミニズムと対立する様を描いている。伝統的女性らしさを崩そうとつづけて来た欧米の児童文学にあっては、大変珍しい作品だと言えるだろう。同作では、リジーと母親の対立に人形コレクターの義理の曾祖母が代理母役を果たしている。リジーは義曾祖母のもとで思う存分人形遊びを楽しみ、最終的に、曾祖母が発作を起こして入院した際、人形遊びでしてきたのと同じように、曾祖母をベッドに座らせてやり、髪をとかしてやる。このとき曾祖母はほぼ人形と化している。母娘にとっての人形の重要性を象徴的に理解しやすい物語であり、人形がいかに「入れ子構造」をもった遊びであるかを端的によく示している。母は殺せないが、母親を象徴する誰かの世話という行為を人形を通して行うことで、娘は母の力を疑似体験できるのだ。「女の子は人形を叱ったり、罰を与えたり、慰めたりするとき、同

時に、母親に対して自分を守り、彼女自身も母親の威厳を身につけるのである」³⁷⁾ というボーヴォワールの言葉のなかでも、母から自分を守るものであるとの指摘は、母娘の力関係を的確に捉えている。

こうした娘にとっての人形遊びの体験を考えれば、エイダはその手段を得るべきときに得られなかった、ということである。即ち、人形の拒否は、実の母親との母娘関係の破綻と修復不可能な過去を象徴していると考えられる。「I needed a doll a long time ago」と言うエイダの言葉は、実の母がいたときに遡るものであり、「母親を持つのは遅すぎます」と言っているようにも思われる。だからこそ、頑なにスーザンが母親になることを否定するのだろう。エイダは、もらった辞書で後見人という言葉をはき、さらに被後見人を意味する ward が昔は保護する側に使われていたことを知る。そして、「わたしはウォードのほうがいいです。スーザンを助けたいです」³⁸⁾ というが、これは、純粋な人形遊びがもはや不可能なエイダでも、スーザンを母として受け容れるために、人形を世話するようにスーザンの世話をし、助けたいという欲求があることを示していると言える。拒否の裏に受容したいという母性に対する矛盾を抱えているのだ。

残念ながら、エイダが人形遊びに代わる体験をするためには、スーザンからももらった馬のバターもさほどの役割を担っていないように見受けられる。その代わり、エイダが名乗りを上げるのが夜間の火災監視なのだが、このことが逆に、エイダにソールトン夫人との接点を受けることになる。これについては次頁の「母娘関係の排他性」の項目で詳述する。

対立の場としての寝室と母体としての家屋

戦争の影響でソールトン家の屋敷が政府によって接収されたことを受け、ソールトン夫人はエイダたちの家へ引っ越してくることになる。エイダたちが住まわせてもらっている家がもともとソールトン夫人の持ち家だからだ。嫌がるエイダをスーザンは論すが、エイダはマギーと一緒に部屋を使うことは了承しても、夫人が自分の部屋をマギーの部屋のようにつくりかえてしまったことに不平をいう。エイダの部屋には、ベッドがもう一つ持ち込まれ、洋服たんす、本棚、ベッドカバー、カーテン、じゅうたん、次々とマギーの部屋のものに変わってしまい、エイダの持ち物はマギーのたんすや本棚に吸収され

てしまう。

前述の *Lizzie Zipmouth* でも、リジーの寝室に対する母親のフェミニズムの浸食が描かれている。母の再婚によって引っ越した先の新しいリジーの部屋のベッドカバーとカーテンを選ぶ際、リジーはピンク色がいいと言うのに対し、母は「ピンクはちょっと女の子っぽい girly」³⁹⁾ と反対するのだ。そして、何も言葉を発しなくなったリジー（題名の *Zipmouth* の由来）をよそに、母はリジーの部屋を赤と紫のチェックのカーテンとベッドカバーにしてしまう。実際に、寝室がティーンエイジャーの女の子にとってガール文化を担う重要なプライベート空間であるとの分析もあるとおり⁴⁰⁾、プレティーンとはいえ、リジーとエイダにとっても自分自身のアイデンティティと部屋が等価の空間になっていることを示している。

エイダの場合、リジーとの相違点は、母の価値観ではなく夫人の娘の部屋に変えられてしまったことである。ここに、エイダの「代理娘」化の布石が見てとれるだろう。夫人はエイダのアイデンティティである部屋をマギーのアイデンティティで塗り替えてしまったのである。「代理母－代理娘」関係のための整備として、ブラッドリーは、正確なパズルをはめこむように着実にエイダの環境を代理母娘関係に向かって変えていくのがわかる。

しかし、エイダはマギーのようにはなれないと言い、「わたしがどうしたいのかはだれもきいてくれなかった。家全体が、わたしたちのものではなくなっちゃったみたい。ソールトン夫人のものみたいに見えます」⁴¹⁾ というが、まさに家は夫人のものなのである。この家が夫人の持ち物だとする構造自体、家屋を一種の母体の空間と捉えることは可能だろう。アルストンが「家は擬人化され、母になるのだ」⁴²⁾ と述べるとおり、母親と家は主人公の状況次第でイコールで結びうる。「In a text devoid of key female characters it is noteworthy that the need for the maternal is still apparent and moreover that this need is articulated in the depiction of the home as it becomes the substitute mother. 主要な女性登場人物がいないテキストでも母性への必要性は明らかで、この必要性が、家が代理母になることで家の描写のなかに表現されることは注目し値する」⁴³⁾。家も代理母になりうるなら、エイダの住む家が、代理母に変貌する夫人の持ち家であるのは当然かもしれない。エイダ

のこの状況は、先述の右足を見せろといった夫人へのエイダの印象同様、本来の母親とは事程左様にうっとうしく覆いかぶさってくるものであるということをよく表しているだろう。もっとも、実母の虐待下にあったかつての生活では個人としての空間が尊重されたことはなかったことを思えば、自分らしい空間が確保されるべきだと主張することは、エイダには重要な成長の印でもある。

母娘関係の排他性

『母親業の再生産』⁴⁴⁾の賛否は数あるだろうが、チョドロウが描き出した母子関係の間主観の関係性の排他的性質は、成長に応じて人間がひとりの他者との関係を構築する際の重要な基盤であると言える。児童文学でもその排他的な母と娘の一对一の密な関係性が描かれることがあるが、エイダとソールトン夫人の代理母娘関係も、夫人がエイダの家に引っ越して来て以降、排他性を帯び始める。エイダの最初の火災監視当番が夫人と組まれていることは、この排他性の契機だと言っていいだろう。特に、この当番の最初と最後を夫人と組ませているところなど、プロットの精確さが現れている。夜の暗闇のなか、教会の塔をとともに登って、二人きりで監視をする時空間は実際、排他的である。この時空間が、戦争という危機や不安に取り囲まれていることによって、関係性の深化に繋がっていることは言うまでもないだろう。さらには、エイダにとって、塔を登ることが実の母に閉じ込められていた恐怖を思い出させる空間でもある点で、母への恐怖の克服の場でもある。

夫人は、最初の当番の際、役に立ちたいというエイダに、自分も役に立つとを感じるのがうれしいことに気がついたという。料理がうまく、オックスフォードで数学を修めたようなスーザンと比較して、夫人は、自分がそのような女性ではないことを吐露する。「わたくしは料理やお裁縫を習ったことがないのよ。スーザンとちがって、かんたんな計算はできて数学はわかりません」⁴⁵⁾。このあたりから、夫人とエイダの精神的な繋がりがや共感が含まれ始める。

このあとスーザンとも一緒に火災監視をすることになるのだが、エイダはその心境を、夫人と組むよりはましだが「dreaded」⁴⁶⁾だと語る。これはやはり、母親の存在にあたるスーザンとの一对一の状況が、まだエイダには恐怖と圧迫を感じさせるような

ものであることをよく物語っているだろう。スーザンという母の力に負けてしまわないためにも、エイダは自分が役に立つと感じたいのである。

一方、ソールトン夫人は、自分でも告白しているとおり、戦争以前は広い屋敷の夫人として雇い人を取りまとめる役割だけをこなしていればよかったのだろう、「家事はあまりやらない」⁴⁷⁾。後々の蓄えに配慮もせずに高いラム肉を買って来てしまったりと、買い物もろくにできない。代理母としての夫人が、典型的な主婦像を体現した人物ではないという点で興味深い。その点では、夫人と過ごす時間の方がエイダは自分の長所を感じやすいのかもしれない。ここに、夫人がエイダから学ぶ余地がうまれる。

ある日、夫人はスーザンにエイダと二人で夜の食事をつくると言い、エイダを買い物に誘う。そして二人で夕飯をつくろうとするのだが、これが火災監視の次の彼らの二人だけの作業になる。台所に立つエイダから夫人は、エイダが住んでいたスラム街の状況を聞き、母親から部屋に閉じ込められていた話を聞く。それに対して「スーザンから聞いたことがありますよ。でも、信じていなかったわ」⁴⁸⁾と夫人は答える。物語の冒頭でエイダが知ることは信じることに繋がない、と語ったとおりに、夫人も、実際に知ったことと、それが本当にあると信じられることとの隔たりを埋めるような作業をエイダの言葉からしているのである。夫人は、料理の札を言うスーザンに対し、「自分がどれだけものを知らないかを学びはじめたところですから」⁴⁹⁾と答えるが、これは新しく様々なものごとを知っていく必要のあるエイダの状況と重なり合う。火災監視に続き、台所という母親らしい空間において、エイダだけでなく夫人もエイダから学びを得ていることが興味深い。

代理母娘化

以上のように、火災監視の当番制をきっかけに、エイダにソールトン夫人との接点ができ、ここから物語は代理母としてのソールトン夫人を躍如として描くだけでなく、エイダも寄宿学校へやらされているマギーの代わりとして、夫人にとっての娘代わりを務めるという「代理母娘」の二重構造を見せる。そしてこの二人の代理母娘の様相は、スーザンの入院で極となって現れる。物語の背景である戦争というもう一つのプロットを引っ張っていた夫人の息子ジョナサンの戦死と、家で預かっていたユダヤ人の

少女ルースがオックスフォードに合格し、イギリス政府のために働くことになって家を出ると、このタイミングでスーザンは肺炎にかかり、ロンドンの病院に搬送されることになる。プロットは物語の佳境として、スーザンとエイダの母娘関係の接ぎ木をいよいよしっかりとした幹として繋ごうとし始めるのだ。

スーザンの具合が悪くなったとき、人生の経験値が極度に少なかったエイダは、スーザンの病状が悪化していることに気づかないまま、適切な処置ができない。自分はむしろスーザンの ward になるのだ、と世話をしたがった彼女だが、それができないのである。そして、スーザンがロンドンの病院に搬送されることで、見舞いに訪れたロンドンでの日々が、エイダをソールトン夫人の代理娘にさせる。

特筆すべきは、ロンドンに着いてからの夫人のエイダへの言葉が命令調であることだろう。「じろじろ見てはいけません」⁵⁰⁾「教会用のワンピースに着がえなさい。顔を洗ってね」⁵¹⁾そして、要らないというエイダに新しいコートを買おうとデパートへ連れ出す。家事の出来なかった夫人が、エイダの挙動や服装に注意をし、ロンドンで今やまさに「母親」をやっているのである。どの色のコートがいいか、夫人はエイダ自身に選ばせる。エイダは、スーザンが以前言っていた赤は疲れて見えるという感想を頼りに、自分に似合う色を選び取る。これこそ、夫人が引越してきた当初、自分の部屋がマギーの物で溢れてしまったこととは対照的に、これから思春期に入るだろうエイダにとって「娘」としての自分で選ぶ権利を授かった瞬間でもある。

こうして二人はデパートで買い物をしたり、昔マギーと訪れたという動物園にも行く。ここでの夫人とエイダは、最も「代理母娘」の様相を呈している。そして、夫人がかつて自分の住んでいた建物の窓を示して、自分の子ども時代がいかに孤独だったかを語る。夫人はエイダのように閉じ込められていたわけではないが、子守と家庭教師に育てられ、本当の友だちを持たない孤独な子ども時代だった、と語っている。エイダは、「わたしと同じ三階だ。／ソールトン夫人とわたしにも、共通のものがあったのだ」⁵²⁾と思う。重要なのは、ここで共有されているものが孤独であるということだ。なぜなら、それはエイダが今まで誰とも共有できなかったものだからだ。

最後に行う火災監視は、まさに夫人が全快してい

ないスーザンの「かわりにやる」⁵³⁾と申し出ることによって「代理母」をこれまでのどの場面にも増して象徴している。その際、夫人は、ドイツの墜落した爆撃機のなかに若いドイツ兵の焼死体を見てしまう。ショックで何も話せなくなってしまった夫人のことを、エイダは「ソールトン夫人が、こわれそうになっています」⁵⁴⁾という。スーザンの悪化する肺炎の病状がわからなかったのとは反対に、エイダは、夫人の様子から夫人には今こそマギーが必要であるとすぐに識るのだ。代理娘であるエイダだからこそ、この必要性がわかるのである。

同時に、マギーを寄宿学校から連れ戻すことは、互いの「代理母娘」の任を解くことも意味している。マギーを必要とするソールトン夫人のもとに連れ帰った際に、駅でスーザンがエイダを抱擁する場面で、スーザンとの母娘関係の接ぎ木は見事に成就すると言える。同章の最後に、エイダはこう語る：

わたしの足は、完全に正常にはならないけれど、歩けるし、階段ものぼれるし、走ることもできる。気持ちも同じで、完全とはいえないけれど、じゅうぶんいやされている。(略) マギーのいびきをききながら、これまで戦ってきたもののことを考えていた。負けたことも、勝ったことも、全部。⁵⁵⁾

エイダがようやく、癒されたと考えることができたのは、夫人を通して母親というものを知り、夫人のなかにある娘への要請に応じて娘役を疑似体験したからだろう。エイダはこのあと、寝室を出てスーザンの部屋へ行き、スーザンのベッドと一緒に眠る。

代理母娘を支える不在者

こうした「代理母娘」の状態を、デリダなら「代補」の一種だと言うかもしれない。そう考えれば、同書においてエイダの代理娘化が可能である理由は、ソールトン夫人側の要請以上に、マギーがいるからこそである。ふりかえれば、マギーこそ、エイダに辞書をプレゼントすることを提案する張本人だ。寄宿学校へ行くときには、エイダに「お母さまのこと、よろしくね」⁵⁶⁾と頼んでいる。エイダがあれほどやりたがっていたスーザンの世話と対照的に、夫人をよろしくと言われていたのだ。マギーは夫人とエイダの代理母娘の橋渡し役をしているのである。寄宿学校の生活をいやがり、最後にはやつれたようになるマギー⁵⁷⁾は、不在という犠牲を払う点で、物

語中最もエイダのために存在していると言える。

もうひとつの不在として、祖母の不在がある点も興味深い。マギーのスコットランドにいる祖母も、収容所で亡くなるルースの祖母も、*Lizzie Zipmouth*の義曾祖母のように代理母となって出現してはくれない。この不在は、代理母であるソールトン夫人との力の均衡を保つ関係上、登場しないと見ることは可能だ。しかし、唯一最後に登場するベッキーの母こそ、スーザンが母親となった今、エイダの仮の祖母として登場すると言える。二重化された母娘関係のおさまるべき帰結を見届ける高位の存在として、最終的にやはり「grandmother 祖母」が出現していると考えれば、これも非常に興味深い帰着点だ。

スーザンとベッキーがレズビアンカップルであったことをうかがわせている点からも、物語のなかに一人として典型的な母親像は登場しない。スーザンは数学の才能を活かして政府の仕事を請け負う知的な人物に描かれており、ソールトン夫人もおせっかいで押しの強い母親臭さはあるが、家事や家計の維持には疎い一方、エイダとともに戦争下で新しいことを学んでいく。こうした女性像は、「母親であることを、絶対善とも、絶対悪ともしない」⁵⁸⁾と言える。ブラッドリーが同書において描き出した母娘関係と女系登場人物のつらなりは、非常に多様でありながら、その関係性には母娘関係／代理母娘関係とそれを成立させる不在者の間に、明晰な整合性がとれていると言えるだろう。

おわりに

同作の最後にエイダは、「知りたいと思えば、ものごとは好きなだけ知ることができる。そして、知ったことを信じられる日が、いつか来るかもしれない」⁵⁹⁾と語る。これについて、ニューヨークタイムズ紙の書評では、「この「かもしれない」が本のなかの私のお気に入り」の言葉だ。この言葉でエイダを信じられるし、彼女の旅を信じられる。この本の美しさは、このかすかな変化にある」⁶⁰⁾と評している。作者のブラッドリーは子どもの頃の性的虐待のトラウマを抱えていることが知られているが、彼女は『1939年』を書いたこととエイダにとっての癒しについて、「It's a slow process. There's never a magic turning point in the book in which Ada is suddenly healed. Trauma survivors don't heal like that」⁶¹⁾と語っている。また、訳者の大作道子氏が後編

あとがきで、「苦しみを乗り越えるには時間がかかることを伝えるために、長い道のりを丁寧に追って書きあげた、作者ブラッドリーの誠実さも感じます」⁶²⁾と述べているとおり、物語の魅力では前編には敵わないが、ブラッドリーのキャラクターへの真摯な姿勢はむしろ続編の方で発揮されているように思われる。

実の母を退け、前編の代理母役のスーザンを退け、続編の第二の代理母役のソールトン夫人を経て成り立つ母娘／代理母娘の関係性は、トライツが言及したように、それ自体が入れ子構造のような二重の母娘関係である。おそらく、エイダの受けた虐待の傷を癒すには、ブラッドリーが語るとおり時間のかかるプロセスが必要だったのであり、単純な母殺しでは成就できないのだろう。児童文学はそのとき、殺せない母に代わって、なお母たる存在を立てることで母性的力との折衝を学ばせ、娘のアイデンティティの形成を促してから、その関係性を本来の母へと引き継ぐのである。

<注>

1. なお、ブラッドリーはアメリカ人であるが、イギリス児童文学と第二次大戦時の集団疎開の描かれ方については、川端有子：第二次世界大戦中のイギリスの集団学童疎開と児童文学への展開、日本女子大学大学院紀要、28、243-249（2022）を参照。
2. 入れ子構造に関しては、斎藤環も『母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか』（2008）の中で、川上未映子著『乳と卵』（2008）について言及しており、「言葉はまるで卵子のよう」であり、言葉は自分の身体から出てくるにもかかわらず、「当の身体には、つねにすでに言葉が棲みついて」（193）いると述べている。後に考察するように、夫人がエイダに辞書をプレゼントすることを考えても、言葉との関連が出現するのは非常に興味深い。
3. トライツの挙げている二作、『クローディアの秘密』と『わたしはアリラ』の主人公も12歳前後であることをトライツは指摘しているが、これを「受胎可能な身体になりかけたところ、物語の力を学ぶため、作品のなかで芸術性と母性が結びつく」（203）のだと述べている。だが、エイダやリジーが彼らのさらに年下であることも考えあわせ

れば、母を自ら退けようとする反抗心の生まれる思春期以前の主人公こそ、母との葛藤を別のかたちの母性（代理母）とともに調整したいという意識下の欲求があるのではないかと考える。

4. また、祖母－母－娘の三世代の関係性を扱った作品については、Crew H. S. : *Is It Really Mommie Dearest?: Daughter-Mother Narratives in Young Adult Fiction*, Maryland: Scarecrow Press (2000) の第 8 章でも参照。

<引用文献>

- 1) 主に、Trite, R. S. : *Waking Sleeping Beauty: Feminist Voices in Children's Novels*, Iowa: University of Iowa Press (1997) / トライツ, ロバータ・シーリングー：ねむり姫がめざめるとき：フェミニズム理論で児童文学を読む, 織田まゆみほか訳, 阿吽社, 東京 (2002) ; Crew, H. S. : *Is It Really Mommie Dearest?: Daughter-Mother Narratives in Young Adult Fiction*, Maryland: Scarecrow Press, Inc., (2000) ; 母親像については、Farustino, L. R. & Coats, K. (ed.) : *Mothers in Children's and Young Adult Literature: From Eighteenth Century to Postfeminism*, Jackson: University Press of Mississippi (2016) の Introduction に先行研究がまとめられている。
- 2) キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー：わたしがいどんだ戦い 1940 年, 大作道子訳, 評論社, 東京 (2019)
- 3) Kimberly Brubaker Bradley : *The War I Finally Won*, New York: Dial Books (2017)
- 4) キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー：わたしがいどんだ戦い 1939 年, 大作道子訳, 評論社, 東京 (2017) / Kimberly Brubaker Bradley : *The War That Saved My Life*, New York: Dial Books (2015)
- 5) ウイルソン, ジャクリーン：リジーとひみつのティーパーティー, 尾高薫訳, 理論社, 東京 (2008)
- 6) Wilson, J. : *Lizzie Zipmouth*, London: Young Corgi Books (2000)
- 7) オリヴィエ, クリスティアース：母と娘の精神分析 イヴの娘たち, 大谷尚文・柏昌明訳, 法政大学出版局, 東京 (2003/1990) ; 斎藤環：母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか, NHK 出版, 東京 (2008) ; 斎藤環：母と娘はなぜこじれるのか, NHK 出版, 東京 (2014) ; 斎藤学：インナーマザーは支配する, 新講社, 東京 (1998) ; 信田さよ子：母が重くてたまらない－墓守娘の嘆き, 春秋社, 東京 (2008) ; 信田さよ子：母・娘・祖母が共存するために, 朝日新聞出版, 東京 (2017)
- 8) 前掲 7, 斎藤 (2008) 16
- 9) 同上, 33
- 10) 同上, 161
- 11) 前掲 9
- 12) エリアシェフ, キャロリーヌ／エニック, ナタリー：だから母と娘はむずかしい, 夏目幸子訳, 白水社, 東京 (2005)
- 13) 同上, 153
- 14) 同上, 175
- 15) 前掲 1, Trites (1997/2002)
- 16) カニグスバーク, E. L. : クローディアの秘密, 松永ふみ子訳, 岩波書店, 東京 (1969)
- 17) ハミルトン, ヴァージニア：わたしはアリラ, 掛川恭子訳, 岩波書店, 東京 (1985)
- 18) 前掲 15, Trites (1997) 119
- 19) 前掲 15, トライツ (2002) 205
- 20) 前掲 1, Crew (2000) 133
- 21) 前掲 12, 263
- 22) 前掲 7, 斎藤 (2014) 174-180
- 23) Joosen, V. : Second Childhoods and Intergenerational Dialogues: How Children's Literature Studies and Age Studies Can Supplement Each Other, *Children's Literature Association Quarterly*, 40, 2, 126-140, (2015) ; Joosen, V. : Age Studies and Children's Literature, Beauvais, C. & Nikolajeva, M. (ed.) *The Edinburgh Companion to Children's Literature*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 79-89 (2017) ; Joosen, V. : *Connecting Childhood and Old Age in Popular Media*, Mississippi: The University Press of Mississippi, (2018)
- 24) Harper, S. & Ruicheva, I. : Grandmothers as Replacement Parents and Partners: The Role of Grandmotherhood in Single Parent Families, *Journal of Intergenerational Relationships*, 8, 219-233, DOI: [10.1080/15350770.2010.498779](https://doi.org/10.1080/15350770.2010.498779) (2010)
- 25) 前掲 3, 1

- 26) 前掲 3, 11, 下線筆者(邦訳:「母さんとわたしに幸せな結末がありえたかどうか分からない。(略)でも, そうなると信じ抜くことはできなかった」15)
- 27) 同上
- 28) 前掲 3, 62/前掲 2, 73
- 29) 前掲 2, 78
- 30) 前掲 2, 79
- 31) 前掲 3, 69, 原文強調(邦訳:「ソールトン夫人はいい人じゃない。強烈な人だ。おせっかいだし, いつだって自分の思いどおりにする。(略)わたしの手術代をはらってくれた(略)でも, 喜べないものはしょうがない。」前掲 2, 82)
- 32) 前掲 2, 107/前掲 3, 90 原文イタリック
- 33) 前掲 2, 108
- 34) Coats, K. : *Looking Glasses and Neverlands: Lacan, Desire, and Subjectivity in Children's Literature*, Iowa City : University of Iowa Press (2004)
- 35) 前掲 3, 93 (邦訳:「ずっと昔にあればよかったです。今じゃもう, おそすぎます, 人形をもつのは」前掲 2, 110)
- 36) ド・ボーヴォワール, シモーム: 決定版 第二の性Ⅱ 体験, 中嶋公子・加藤康子監訳, 新潮社, 東京, 27-31 (1997/1949)
- 37) 同上, 27
- 38) 前掲 2, 126
- 39) 前掲 6, 20
- 40) Nayak, A. and Kehily, M. J. : *Gender, Youth & Culture: Global Masculinities & Femininities*, 2nd edition, Houndmills, Basingstoke, and Hampshire: Palgrave Macmillan, (2013)
- 41) 前掲 2, 142
- 42) Alston, A. : *The Family in English Children's Literature*, Abingdon and New York: Routledge, 79, (2008) 下線筆者
- 43) 同上
- 44) チョドロウ, ナンシー: 母親業の再生産: 性差別の心理・社会的基盤, 太塚光子・大内菅子訳, 新曜社, 東京 (1981/1978)
- 45) 前掲 2, 174
- 46) 前掲 3, 196
- 47) 前掲 2, 175
- 48) 同上, 214
- 49) 同上, 215
- 50) 同上, 392
- 51) 同上, 393
- 52) 同上, 406
- 53) 同上, 418
- 54) 同上, 422
- 55) 同上, 432
- 56) 同上, 201 (原文: "Take care of her for me.", 前掲 3, 171)
- 57) 同上, 344
- 58) 前掲 1, トライツ (2002), 205
- 59) 前掲 2, 445
- 60) Snyder, L. : 'The War I Finally Won' Tells One English Girl's Survival Story, Jan. 12, *The New York Times* <https://www.nytimes.com/2018/01/12/books/review/kimberly-brubaker-bradley-war-i-finally-won.html> (Accessed: 28 Oct., 2023) (2018)
- 61) Bradley, K. B. : Chronic PTSD, Ada, and Me, *One Blog Now*, Friday Jan. 8, <https://kimberly-brubaker-bradley.blogspot.com/2016/01/chronic-ptsd-ada-and-me.html> (Accessed: 28 Oct., 2023) (2016)
- 62) 前掲 2, 449

(指導教員: 川端有子教授)